



N-BLOOD
NISMO Communication Magazine

NISMO Communication Magazine **N-BLOOD** 2024 / August No.103 Nissan Motorsports & Customizing Co., Ltd.



SAMPLE

N-BLOOD

NISMO Communication Magazine
2024 / August
No. **103**

nismo

Produced by Nissan Motorsports & Customizing Co., Ltd

敢闘のチェッカーフラッグ

24時間レースは、いつでも過酷で厳しいものだ

綿密に準備を整え、幾通りものシミュレーションを重ねてきたとしても

想定をあっさりと上まわる出来事やトラブルが、四六時中襲いかかる

それでも、誰もが24時間先の栄光を求め、力の限りを尽くす

だからこそ、走る人も支える人も観る人も、すべてを惹きつける魅力にあふれているのだ

今年は悔しい結果に終わった日産勢。来年こそ、表彰台の頂点へ――

SAMPLE

- 4 **2024 SUPER GT SPECIAL TALK SESSION**
特別対談 さらなる高みを目指して
#3 Niterra MOTUL Z 島田次郎×高星明誠×三宅淳詞
- 8 **Interview with EXECUTIVE DIRECTOR**
4チームの全体的な底上げを狙いたい
総監督インタビュー・木賀新一
- 10 **2024 SUPER GT SERIES GT500 CLASS**
第2戦富士を制した3号車が
3戦を終えてランキング2位に
- 12 **2024 SUPER GT SERIES GT300 CLASS**
新ラインナップで臨むシーズン
前半3戦で日産勢が奮闘
- 14 **2024 SUPER TAIKYU SERIES**
3台のNISSAN Z NISMO GT4がエントリー
デビューウィンは惜しくも達成ならず
- 16 **FUJI SUPER TEC 24H TOPICS**
どう過ごした？
N-BLOOD的富士24時間レース秘情報！
- 18 **2024 PIRELLI GT4 AMERICA**
日産ゆかりの地セブリングで
NISSAN Z NISMO GT4が初優勝
- 20 **FIA Formula E World Championship Season 10**
初の東京開催で殊勲の2位表彰台
続くミサノでは待望のシーズン初勝利
- 24 **2024 Tokyo E-Prixに行ってきました！**
- 26 **Special Issue**
ツーリングカーレース史に大きな足跡を残した
都平健二さんを偲ぶ
- 28 **40th ANNIVERSARY**
NISMOブランド40周年記念企画
知られざるNISMO ～その2
- 32 **MOTORSPORTS**
PADDOCK TOPICS
- 34 **Club NISMO EVENT REPORT**
昨年に続きNISMO会社見学ツアーを開催
- 36 **WORKS TUNING CIRCUIT DAY**
「ワークスチューニングサーキットデイ」が盛大に開催！
- 37 **NISMO PRODUCT**
スカイライン（V37）NISMO用
スポーツリセッティング TYPE-2が発売
- 38 **NISSAN/NISMO COLLABORATION GOODS**
大人気ドライビングゲームで日産の人気モデルを操る喜びを
- 39 **PRESENT**
読者プレゼント



2024 SUPER GT SPECIAL TALK SESSION

特別対談

さらなる高みを目指して

#3 Niterra MOTUL Z

島田次郎×高星明誠×三宅淳詞

三宅淳詞選手を加えた新体制、そしてブリヂストンタイヤを装着して臨む2024年シーズン

第2戦富士でシーズン初勝利を挙げた#3 Niterra MOTUL Zの

島田次郎監督、高星明誠選手、三宅淳詞選手に、あらためて序盤2戦を振り返ってもらった

新体制で挑むシーズン 第2戦富士で殊勲の優勝

NB：まずは開幕戦の岡山から振り返って頂けますか？

島田次郎（以下島田）：シーズン開幕前のテストは雨がらみのコンディションが多く、ドライできっちり走り込むことができませんでした。加えて、今年からタイヤがブリヂストンさんになっているので、正直なところ、ちょっと走ってみたいと分からないなかでのスタートでした。目標としてはポイント獲得。まあ4位や5位あたりを獲りたいなというところで結果が6位でしたから、まあまあかなという印象でした。

NB：高星明誠選手、三宅淳詞選手の評価はいかがでしょう。

島田：高星選手はこのチームで3年目になるので、普段どおりにちゃんと走ってくれたという感じ。三宅選手は組むのも初めて、GT500も初めて、タイヤも初めてという初めて尽くしでした。これまではGT300でしたから“抜かれる側”だったのが“抜く側”になるわけです。それはなかなか練習できるものではありませんし、実戦で慣れていくしかないのですが、岡山ではうまく完走してポイントを獲得してくれたなど。

あと、今年から予選方式が変わり、Q1で使ったタイヤでQ2もアタックしなくてはならなくなりました。合同テストでのシミュレーションから、Q2は三宅選手に担当してもらっていますが、他のマシンと比較しても悪くないタイムを出してくれたのも良かった点かなと思っています。

NB：高星選手は第1戦が終わった段階での手応

えをどう感じましたか？

高星明誠（以下高星）：島田監督から話があったように、事前のテストで雨が多く、6位にもなれるとは思っていませんでした。ブリヂストンタイヤの経験がなく、ドライでのロングランもきちんとできていなかったからです。やはり、これまでブリヂストンタイヤのデータや経験があるチームの方が、レースは強いのかなという印象を持っていた、レースはちょっと辛くなると考えていました。でも、データが少ないなかでもきちんと走り切れて6位が獲れた点は、ポジティブな要素でした。

NB：予想よりもタイヤを使いこなせたのか、あるいはイマイチななかでもきちんと走れたのか、どちらの印象だったのでしょうか。

高星：クルマのバランスはあまり良くなかったの

で、岡山では“うまくタイヤを使いこなせていなかったけれど、タイムを落とさずに走れた”という感覚です。

NB：三宅選手は初めてのGT500を終えて、どのような印象でしたか？

三宅淳詞（以下三宅）：やはり難しいと思ったのは、これまで抜かれる立場だったのが抜いていく立場に変わったところでした。途中23号車に抜かれてしまったのですが、第1戦を通じてオーバーテイクの仕方について、完璧ではないですけど学ぶこともできましたし、しっかりポイントを獲得して6位でゴールできたという点は、良かったのかなと思います。

NB：第1戦岡山から第2戦富士に反映できた点がありますか？

島田：富士は独特なサーキットなので、クルマのセットアップというかハード的に活かせる点は少ないと思います。でも、ドライバーのコンビネーション、QFの分担、レースのスティント割り、そしてタイヤがどのくらい消耗してどの程度のペースで走れるのか、これらがまったく分からないなかで、岡山のデータからフィードバックできたものはあったかなと思います。

NB：第2戦富士では、高星選手がスタートからリードを広げて三宅選手が最後に逃げ切った格好でしたが、事前の想定どおりだったのでしょうか。

島田：高星選手でスタートして、2スティント乗ってもらって、最後に三宅選手でフィニッシュというのは、当初から予定していたとおりです。でも、セカンドスティントであればギャップを広げられるとは思っていませんでした。その点は嬉しい計算外でしたね。

NB：高星選手は、差を広げられた要因をどうお考えですか？

高星：セカンドスティントで履いたタイヤがコンディションに合ってくれたことが、一番の要因かなと思います。

NB：三宅選手にバトンタッチした後、心配だったことはありますか？

高星：タイヤのムービングやピックアップの問題はサードスティントでも起こりうる状況だと思っていたので、それが唯一心配なところでした。

NB：3時間レースの最終スティントともなると、コースコンディションは悪そうですね。

高星：サードスティントでは、よりピックアップがついてしまう可能性も考えられまし、三宅選手もピックアップの経験は多くないと思うので。ピックアップの飛ばし方などは少し心配ではありましね。

NB：最後のスティントを担当した三宅選手は、今の話も含めて、どのような思いで乗っていましたか？

三宅：後続と差があったので、落ち着いて走ることができましたし、接触やイエローフラッグの脱落としなど凡ミスをしないうに心がけていました。ピックアップの経験はなかったなので、その点の不安はありましたが、セカンドスティントで差

を広げていただいていたので、焦りもなく、自分の走りができたと思います。

NB：ピックアップがつくと、かなり操縦性が変わってくるものなのでしょうか？

三宅：そうですね。僕はまだ2戦しか走っていませんが、ちょっと走りにくいですし、クルマがまっすぐ走らなくなったりします。僕自身も経験を積んで、対応できるようにしていかなければいけないと思います。

NB：難しいコンディションを学びながらの戦いでしたね。島田監督は、優勝を確信したポイントなどはありませんか？

島田：本当に最後の数周になってからですね。確かに大きなギャップはありましたが、セーフティカー（SC）でマージンが一瞬になくなってしまいうこともありますから。それに、ひとりのドライバーの最大運転時間が2時間とされているから、ドライバーの順番を高星・高星・三宅としていた我々は、ほかのパターンで乗ったチームよりも2回目のピットタイミングが早まり、サードスティントのラップ数が比較的長かったのです。スティントが長い分タイヤも消耗するので、ライバルの追上げも警戒していました。そうしたことがおそらくないだろう、あるいはSCが入ってもそのままチェッカーになってしまうという段階となれば、さすがにひと安心できました。**NB**：その点、高星選手や三宅選手はいかがでしょう。

高星：監督が言うように、SCになってしまった瞬間にリードがなくなり、僕らが不利になる状況だったので、最後の2～3周くらいまでは安心できなかったですね。

三宅：僕も一緒です。富士スピードウェイは残り時間も見えていますし、SCが入ってしまったりアクシデントがあったりすると不利になってしまう状況だったので、残り1周とか2周まで、“何も起きないでほしい”っていう気持ちが大きかったです。

NB：初めてGT500で優勝のチェッカーを受けた時の気持ちを、あらためて聞かせてください。

三宅：もちろん優勝を目指して戦ってはいますけ

ど、GT500に参戦して2戦目で勝るとは正直想像もしていなかったので、嬉しさもありましたが、それよりも驚きの気持ちが大きかったと思います。

NB：ピットに戻ってきて、優勝を最初に報告したのはどなたですか？

三宅：両親には連絡しましたが、田中哲也さんには現場で直接、報告に行きました。苦しい時から面倒を見て支えてくださっていたので。

NB：何とおっしゃっていましたか？

三宅：『100年早いわ！』って言われました（笑）。**NB**：高星選手はNDDPでお世話になった長谷見昌弘さんと何かお話をしたりしましたか？

高星：長谷見さんが富士にいらしていたので報告をしたかったのですが、お会いできなくて。レースから帰った後に電話をもらいました。ファーストスティントとセカンドスティントの速さや途中のギャップの作り方について、完璧だったよって声を掛けていただきました。

スピードは証明できたが まだまだ改善点も

NB：2位に入った23号車にも大きな差をつけてのフィニッシュでした。大きな要因となったものは何でしょうか。

島田：あまり詳細は言えませんが、23号車とは



SCのタイミングなど、不確定要素が多いSUPER GTでの戦いはどれだけ後続とのマージンがあっても十分とは言えず、最後の最後まで安心できない。コース内外からの応答が後押しとなった（写真上）。フィニッシュラインを越え、マシンを降りてスタンドの声援に応えたこの瞬間、ようやく長い緊張が解けた（写真下）。





今季から使用するブリヂストンタイヤへのマシンセットアップや戦い方を分析し理解に務める状況下で、早い時期に勝利を挙げられたことは選手権を戦ううえで非常に大きな意味を持つ。しかし島田監督は究極の車両造りを求め、その手を休めない。

選択しているタイヤが違ったので、それが大きかったのかもしれない。

それにどこのチームもそうだと思いますが、今年から車高の規則が変わり、さらに3時間レースということもあって、スキッドブロックが実際にどこまで減るのか分からず、車検が終わるまではヒヤヒヤだったわけです。もちろん車検も通っていますし、自分たちで計測してもちょうどいい感じのところでした。車高は低ければ低いほど速いのですが、まちがっても失格は許されません。それはエンジニアが決める領域なのですが、根岸主輔エンジニアがいいところまで攻めてくれた結果でもあると思います。

NB：タイヤのお話が出ましたが、2戦を終えて、良かった点と苦労している部分をおうかがいできますか。

島田：正直なところ、まだ良く分かっていないですね。ブリヂストンタイヤをどう使えば、ドライバーがコントロールしやすく、もっといい感じで速く走れるのか。タイヤの良し悪しではなく、クルマ側でタイヤのポテンシャルをうまく出し切れていないというか……。もちろん色々なことを試してはいますが、これだ、というところまではまだ到達できていないです。2戦目でそこまでいくのは難しいと思います。

NB：外から見ると、すでに使いこなしているようにも見えましたが、実際にはまだまだ勉強中なのですね。

島田：富士は若干特殊なところもあるので、これから鈴鹿、SUGO、オートボリスと続くなかでどうなのか、去年と同じフィーリングで走れるのかは分かりません。

いいところを引き出すため、セットアップなり、ドライビングなりを変えなければいけない部分もあるかもしれません。2戦しか戦っておらず、しかもそのうち1戦が富士ということで、まだまだ理解に努めている段階です。

NB：高星選手は優勝記者会見の際、昨年のレベルにクルマが追いついていないと仰っていました。具体的にはどのような部分なのでしょう。

高星：色々な要素が重なっているとは思いますが、一番は乗りやすさという部分が大きいです。去年は速い遅いにかかわらず乗りやすかったのです。乗りやすさは安定性につながるの、そこはもっ

と改善していきたいなと思っています。前回の富士で速さは証明できましたが、速さだけを見て乗りやすさを疎かにしていくと、ほかのサーキットでの浮き沈みが大きくなる印象があるので、シーズンを通じて安定して速く走るために、乗りやすさを追究していかなければと思っています。

富士に関しては、車両バランスの要素が大きかったと思います。オーバーステアなのかアンダーステアなのか、詳しいことは話せませんが、そのバランスをもっと改善していけないと。いいところにハマれば、勝てるだけのパフォーマンスを出せることは証明できましたが、いつまでも同じ状態で残りのレースを走れるとは限りません。バランスが悪かった時、持ち込みのセットアップが合わなかった時でも、ある程度の速さを出すために、走りやすさが必要だなという印象です。

NB：三宅選手もまだまだの部分が多いとおっしゃっていましたが、具体的にはどうでしょう。

三宅：GT300のかわし方などありますが、やはりタイヤの使い方でしょうか。どのドライバーもそうだと思いますが、もっとピークを引き出したいとか、ロングランでタイヤを守りたいという思いがあるわけです。でもその答えにゴールはなくて、どうやって今よりも良くするのかを考えていくことが大事だと思っています。だからタイムの出し方、タイヤの使い方を改善していきたいと考えています。

スピードだけでなく冷静に戦える点は強み

NB：島田監督にうかがいます。現在の高星選手と三宅選手の強みはどういうところにあるとお考えですか。

島田：高星選手は、昨年の最終戦もてぎの予選や、富士のレースを見て分かるように、速さと強さのあるドライバーです。今年は千代勝正選手が23号車に移ったので、高星選手にはファーストドライバーとして乗ってもらっています。コンビを組むのが若い三宅選手ということで、リーダーシップというか、自分でどんどん引っ張ったり教えたりしてくれる部分は、去年と比べて強まっているのかな。冷静さはいつもどおりなので、彼を頼りにしている部分はあります。

三宅選手は正直まだ良く分かりませんが（笑）、個人的な印象ではかなり肝が据わっているのではないかなと思っています。そういう点は頼もしい。2戦目で勝てて、現時点でいい流れになっていますが、長いシーズンのどこかで苦しい時も来ると思うので、その時にあまり落ち込まずにどんどんブッシュし続けてくれればと思います。

NB：高星選手はファーストドライバーになって、気持ちや役割の変化を感じている部分はありますか？

高星：正直、個人的にはないです。ファーストドライバーだから、セカンドドライバーだからというのは、あまり考えたことはありませんし。違うとすれば、三宅選手が加入して、彼はまだ色々学

んでいる最中です。GT500に対してもタイヤに対しても、日産/NISMOの環境に対しても。知らないで言えることが少ない分、僕が前に立つように見えているという感じだと思うだけで、実際には去年と今年で自分が意識して変えた部分はありませぬ。

NB：役割としては、クルマのセットアップを決める立場になっているのではないですか？

高星：セットアップもデータを使ってチームで決めています。一応今のところは僕が決めているということになるのかな。でも、そういう認識はなくて、みんなで決めているっていう意識の方が強いと思っています。僕と三宅選手の走り方も比較的近くて、大きな差もありません。



今年からファーストドライバーという大役を担うことに対しても「気持ちや役割の変化を感じない」と、これまでどおり高星選手としてのドライバーの理想的な仕事を追求。気負いなく冷静に役割をこなし続ける姿は、自然と三宅選手のポテンシャルを引き出しているようでもある。

NB：三宅選手は、GT500に参戦することになり、生活や考え方など、変化した部分はありますか？

三宅：『レーサーとして勝ちに行く』意識はどのカテゴリーでも一緒ですから、あまり変わっていません。でも先ほど皆さんが言ったように、GT500クラスでは、クルマやタイヤの開発があります。これまで経験したことがない領域なので、しっかりとした評価コメントをすることが大切だと思います。

僕自身にクルマやタイヤの知識がないと、しっかりとしたコメントが出せず開発スピードが遅れてしまうと思います。時間はありますが、より早く多くの物事を習得していけるように頑張っています。

NB：ここまで2戦、NISSAN Z NISMO GT500の強みをどう考えますか。

三宅：もちろんドライバーとして、もう少しこうしたいな、あしたいなっていう課題や改善点は

「嬉しさもあるが、驚きが大きい」と自身の状況を客観的に第三者目線で捉える三宅選手らしいGT500初優勝の感想。冷静に物事を見て判断し吸収した経験が、マシンやタイヤ開発、そしてこの先の戦いにおいて大きな役割を果たしていくことになるだろう。



序盤で1勝を挙げられたのは非常にポジティブ この流れを維持して、盛り上げていく

ありますが、今年、タイヤが変わった状況のなか

でも岡山で23号車がQ1トップタイムを出したり、富士でも1-2フィニッシュでできましたし、色々なコンディション、色々なサーキットでも戦える強みがあると思います。

NB：ワークスチームのクルマに乗るというプレッシャーはありますか？

三宅：3号車は2シーズンともチャンピオン争いをしているので、プレッシャーはあります。でも、ドライバーとしては常にやることは同じですし、落ち着いてミスなく走ることを心がけていこうと思っています。

NB：監督からご覧になって、ふたりはレース中、どのような精神状態で戦っていると思われますか。たとえば無線のコメントなども含めて、感じる部分はありますか。

島田：多くのドライバーと組みましたが、ふたりは極めて冷静に話をしてくれるので助かってますね。特に今年はタイヤが変わって事前のデータもあまりないですし、天気もころころ変わります。3号車は比較的無線で喋っている方だと思いますが、走っている時にも考えを変えたりするので、そういうやり方にもちゃんと付き合ってくれています。

NB：高星選手はいかがでしょう。努めて冷静に走ることを意識しているのでしょうか。

高星：もともとあまり無線で喋る方ではないということと、感情的にならないっていうか、なれないという部分があります。でも、昔より自分の気持ちを抑えるみたいなことは意識していません。戦略やタイヤ選択にしても、自分の意志を伝えるようにはなってきたのかなと思いますね。無線で喋らないようになったのは、長谷見さんが『たくさん喋るドライバーに速い奴はいない。喋りすぎるドライバーは遅い奴だ』というスタンスだったので、自分も喋らなくなったというのが正直なところ（笑）。

島田：え？ 長谷見さん、現役の頃はたくさん喋ってたけど（笑）。

高星：現役の頃のことは知りません（笑）。

NB：三宅選手はどうでしょうか。

三宅：僕ももともと喋るタイプではなくて、落ち着いてレースをしていた方が、客観的に物事を見られると思っています。だから喋らない、というわけではありませんが、俯瞰して物事をとらえられるように努めているつもりです。

王座争いのカギは終盤2戦 苦しい時も取りこぼしなく

NB：あらためて、SUPER GTで年間チャンピオンを獲得するために必要なものとは何でしょうか？

島田：ポイントシステム上、最後の2戦が重要です。そこまでに優勝、あるいは表彰台というビッグポイントを何回か獲って、タイトル争いの列車に乗るチケットを入手し、最後の2戦で仕上げるパターンになると思います。最後の最後で地味に効いてくるのが、表彰台に立たない時でもポイントを少しでも獲っておくことです。

たとえば4位と5位では2点差っているわけですが、直接のライバルと前後して相手が2点多くなると、こちらが得られたはずのポイントが2点減るわけで、実質4点の差になってしまうわけです。そういう部分を隙なくこなせると、最後にチャンピオンを獲れるのかなと。もちろんビッグポイントの数が少ないと戦線にも加われないので、獲れる時に大きく獲り、苦しいところでもしぶとく相手より点を獲って、少しでも差を広げることが重要になると思います。

高星：一番は大量得点を獲ることです。なおかつ、イコールに近い状態の時に強さを示せたのは大きいと思います。そういう意味では、2位じゃダメで1位じゃなきゃいけないと思っています。1位と2位では5ポイントの差ですが、サクセスウェイトは1位が40kg、2位でも30kg積まされてしまいます。サクセスウェイトを積んだ状態で、5ポイントを取り返しに行くのは、なかなか厳しい。そういうことを含めると、1位と2位

の差ってとても大きくて、大量得点を狙うなら1位でないといけないと考えています。サクセスウェイトのレースなので、シーズンを考えれば重い状態でも1点でも2点でも積み重ねていくことが大切だと思います。

三宅：他のカテゴリーと同じく、凡ミスでポイントを落とさないという点は大前提です。SUPER GTはサクセスウェイトのシステムがあるので、どうしても苦しい場面もあると思いますが、その時にも粘り強くワンポジションでも上でチェッカーを受けていくことが、チャンピオン争いをしていく時に生きてくことと思っています。今後のレースに向けて、苦しい時でも諦めずに順位を上げるように戦っていければチャンピオン争いに残れるのかなと思っています。

NB：最後に、Club NISMO 会員へのメッセージをお願いします。

島田：序盤で1回優勝できたことをポジティブに捉えて、今後も気を緩めることなく取り組んでいきます。この流れを続けていけるよう、みんなを盛り上げて一丸となってやっていきますので、今までどおり応援をよろしくをお願いします。

高星：これほど早い段階で優勝できるとは思っていなかったのが、正直な感想です。その分、もっと向上していけるという手応えもあり、それを追究していけば、今よりもっと安定した速さを得られるのではないかと考えています。狙っているところに到達できれば、去年よりもいい結果を残せると思っているので、まずはさらなる向上を目指せればと思っています。

三宅：2戦目で優勝できたのは、自分にとってもとても大きなことだと思っていますし、高星選手が言ったように、さらに改善できる部分はありますし、僕自身にも改善点があると思います。さらに上を目指す、いい流れに乗っていると思います。この流れを崩さずしっかりと戦っていければ、後半戦にもチャンスはどんどん生まれてくると思いますので、落ち着いて頑張っていきたいと思っています。